

日本環境心理学会

第14回大会・総会 プログラム

2021年3月13日（土）13:00～

オンラインカンファレンス

参加費無料（要事前申込）

タイムテーブル

13:00 ～ 13:15 オープニング，諸注意

13:15 ～ 14:15 ワークショップ：『ゲームエンジンを用いたオンライン実験の提案』

話題提供：長野 祐一郎 氏（文京学院大学人間学部心理学科）

小休止

14:30 ～ 15:45 パラレル・セッション1（自然環境，環境配慮行動／社会秩序，防犯）

16:00 ～ 17:00 パラレル・セッション2（コミュニケーション，メンタルヘルス／子ども，女性）

小休止

17:15 ～ 総会・表彰・クロージング

1 今大会の開催形式について

今大会は、ワークショップ、個別研究発表、総会のすべてをオンライン（リアルタイム）で実施いたします。参加には事前のお申し込みが必要です。大会用参加用の URL および ID とパスワードは、参加申し込み後に電子メールにてお知らせいたします。

参加申し込みフォーム（Google フォーム）

<https://forms.gle/vApvpWCvsSZm53YTA>

参加申し込み期限：2021 年 3 月 13 日（土）12:00

2 大会参加に必要なソフトウェア環境について

今大会のワークショップ、個別研究発表には、いずれもオンラインミーティング・ツールの Zoom を使用します。Zoom のインストールや環境設定などは事前にお済ませください。また、個別研究発表はテーマごとに設定したブレイクアウトルームで実施いたします。古いバージョンのソフトウェアでは一部機能が正しく動作しない場合がありますので、Zoom の最新バージョンへの更新をお願いいたします。

Zoom のダウンロード：<https://zoom.us/download>

Zoom サポートページ：<https://support.zoom.us/hc/ja>

3 参加者の皆様へ

- Zoom ミーティングの表示名（ユーザー名）を「氏名_所属」の形式に設定してください。
- 会の円滑な進行のため、Zoom ミーティングへの参加時には**マイクはミュート**に、**ビデオは停止**にしてください。



マイクとビデオの設定

- 講演者への質問には、原則として「チャット」機能をご使用ください。
※チャットはフロア全体に対する発言のみ可能です。参加者間での個別チャットは使用できません。
- 一般参加者による Zoom ミーティングの**録画・録音は禁止**いたします。
※ミーティングの録画・録音は大会運営事務局の管理の上で行います

4 発表者の皆様へ

- 各ブレイクアウトルームには、セッション開始の**5 分前**までに入室してください。
- Zoom ミーティングの表示名（ユーザー名）は、氏名の前に「*」をつけ、「***氏名_所属**」としてください。
- パラレル・セッションにおける個別研究発表の時間は 1 件あたり 15 分（発表 12 分、質疑 3 分）です。発表時間には、画面切替などの操作時間も含めます。時間内に発表を終えられるよう、Zoom の操作方法を含め、事前に十分なご準備をお願いします。
- 発表時は、**ミュート解除**と**ビデオの開始**の設定をお願いします。発表が終わりましたら、再び**マイクをミュート**し、**ビデオを停止**してください。また、画面を共有した場合は**画面共有を停止**してください。
- Zoom の接続テストを大会当日（3/13）の午前中（**9:30～11:30**）に実施予定です。確認を希望される方はご利用ください（接続 URL 等の情報は大会用のものと同一です）。
- Zoom ミーティングを個別に録画・録音しないでください。

※ミーティングの録画・録音は大会運営事務局の管理の上で行います

5 若手優秀発表賞

第 13 回大会より、優れた若手研究者の研究発表に対する「若手優秀発表賞」が設けられています（副賞：奨励費 金壹万円）。若手優秀発表賞の選考対象者は、主発表者で次のいずれかの条件に該当する方です。

- a) 大学院生（修士・博士）在籍者（学部生で大学院への進学予定者も含む）
- b) 博士課程修了後 3 年以内で、かつ、常任のポジションに就いていない者（学振 PD 特別研究員を除く。任期付き特任職も対象外）

※非会員の場合、発表申し込みと同時に学会への入会が必要です。

ワークショップ【13:15～14:15】

会場：zoom メインルーム

ゲームエンジンを用いたオンライン実験の提案

話題提供

長野 祐一郎 氏（文京学院大学人間学部心理学科）

概 要

ゲームエンジンとは、コンピューターゲームの開発において共通して用いられる処理の実装を容易にし、効率化するためのソフトウェア群のことである。ゲームエンジンは、とくに 3D データのリアルタイム処理において力を発揮することから、3D モデルを用いたインタラクティブな景観シミュレーションなど、ゲーム以外の場面でも利用されている。本ワークショップでは、心理学実験におけるゲームエンジンの使用事例を紹介し、オンライン実験におけるゲームエンジンの可能性について考察するとともに、代表的なゲームエンジンの 1 つを用い、実験刺激の具体的な作成方法を実演する。

ゲームエンジンで作成した刺激例は下記の URL で体験できます
<http://protolab.sakura.ne.jp/WGL2/terrain2/>

パラレル・セッション 1 【14:30～15:45】

■ P1 自然環境，環境配慮行動

会場：ルーム 1

座長：白川 真裕

P1-1. Short-form Nature Relatedness Scale (NR-6) 日本語版作成に関する予備的検討

(半沢拓巳・澤内大輔・日田アトム・山本康貴)

P1-2. 注意回復理論 (ART) に基づいた自然の回復効果の検証

(熊谷ななせ)

P1-3. 海と山の選好とパーソナリティ特性の関連およびその調整効果の検討 (吉野伸哉・小塩真司)

P1-4. ゴール・プライミングによるレジ袋利用行動の抑制

(青山謙二郎・残華雅子)

P1-5. 日常のごみ出しを通じた地域コミュニティ向上活動における環境配慮行動の検証：ステージモデルの観点から

(日室聡仁・江島直也・笹鹿祐司・福井知宏・後藤晶)

■ P2 社会秩序，防犯

会場：ルーム 2

座長：畑 倫子

P2-1. スプレッドシートを使用した地理的プロファイリングソフトの開発

(羽生和紀)

P2-2. 自主防犯団体の協働ネットワーク構造と活動の活発さ

(高木大資・大山智也・讃井知・島田貴仁)

P2-3. 防犯活動認知，犯罪情報は居住地評価に関連するか？：住民調査データにもとづく検討

(齊藤知範・山根由子・島田貴仁)

P2-4. 系統的社会観察による住環境の特徴と住民意識との関係 —秩序違反と社会統制に着目して—

(島田貴仁・本山友衣・羽生和紀)

P2-5. 日本における犯罪不安と秩序違反の認知の変化 —repeated cross sectional data を用いて

(鈴木あい・島田貴仁)

パラレル・セッション 2【16:00～17:00】

■ P3 コミュニケーション，メンタルヘルス

会場：ルーム 1

座長：羽生 和紀

P3-1. オンラインで親密さを上げるためのソシオペタル型コミュニケーションの実験的検討

(外山優・広田すみれ)

P3-2. 若者のプライベート空間として利用される施設の持つ機能と環境・立地的特徴との関係

(佐藤理貴・雨宮護)

P3-3. 子どもと保護者のメンタルヘルスとサードプレイス、主観的経済状況の関連

(芳賀道匡・堀川佑惟・上野弘晶・小林翔太・曹蓮・杉森伸吉)

P3-4. コロナ禍における住環境に関する実態調査

(白川真裕・白川徹・若林直子・小島隆矢)

■ P4 子ども，女性

会場：ルーム 2

座長：島田 貴仁

P4-1. 公園への子どもの移動自由性

(畑倫子・雨宮護・島田貴仁・橋村ちひろ)

P4-2. 学校教員による児童の挨拶効果への期待と地域性の考慮

(森裕樹)

P4-3. 公的機関による子供・女性の安全対策の特徴

(山根由子・齊藤知範・島田貴仁)

研究発表概要

P1 自然環境，環境配慮行動

会場：ルーム 1

P1-1 (14:30～14:45)

Short-form Nature Relatedness Scale (NR-6) 日本語版作成に関する予備的検討

半沢 拓巳 (北海道大学)

澤内 大輔* (北海道大学)

日田 アトム* (北海道大学)

山本 康貴* (北海道大学)

近年，環境問題に対する関心の高まりを背景に，自然との心理的つながりの程度を数値化して評価する尺度が，海外を中心に多数開発されている。本研究では，その尺度の 1 つである Short-form Nature Relatedness Scale (NR-6) の日本語版作成に関する予備的検討をする。具体的には，まず NR-6 の質問項目を翻訳，web 調査会社のモニタを対象にデータを収集して，この尺度の測定を試みた。

P1-2 (14:45～15:00)

注意回復理論 (ART) に基づいた自然の回復効果の検証

熊谷 ななせ (法政大学)

本研究では，注意回復理論 (Attention Restoration Theory) に基づいて回復効果の検証を行った。研究 1 では 25 名の参加者に対して景観の評定調査を行い，その結果に基づいて景観の類型を行った。その結果，4 つの景観グループが抽出された。研究 1 の結果をふまえて回復効果の検証を行った (研究 2)。47 名の参加者を自然条件と都会条件に無作為に割り当てて景観刺激を 6 分間提示し，その前後に DSB を測定した。両条件において景観提示後に DSB の改善がみられ，自然の回復効果は確認されなかった。

*非会員

P1-3 (15:00～15:15)

海と山の選好とパーソナリティ特性の関連およびその調整効果の検討

吉野 伸哉（早稲田大学大学院）

小塩 真司*（早稲田大学）

本研究の目的は、先行研究で示された海への選好と外向性の関連について、日本でも再現されるか検討すること、また現在の居住地の性質によってその関連性が調整されるか検討することであった。オンライン調査を実施し、450 名を分析対象とした。調査では海と山の選好、Big Five 尺度、都市生活環境尺度が尋ねられた。分析の結果、いずれの Big Five 得点においても海への選好との関連は示されなかった。一方、居住地について「生活上の快さ」を高く評価した人々において、外向性が高いほど海を好む傾向が見られた。

P1-4 (15:15～15:30)

ゴール・プライミングによるレジ袋利用行動の抑制

青山 謙二郎（同志社大学）

残華 雅子*（同志社大学）

ゴール・プライミングにより節電行動を促進できるとする研究がある（大友, 2016）。本研究ではレジ袋利用行動への応用を試みた。79 名の大学生がプライミング群と統制群に配分された。プライミング群では地球とエコバッグの絵が描かれたポスターに人物の絵を、統制群では地球の絵のポスターに月と星を描き足した。その後、2 週間にわたり毎日のレジ袋利用枚数を記録した。その結果、プライミング群のレジ袋利用枚数は統制群よりも少なかった。

*非会員

P1-5 (15:30～15:45)

日常のごみ出しを通じた地域コミュニティ向上活動における環境配慮行動の検証：ステージモデルの観点から

日室 聡仁 (NEC ソリューションイノベータ株式会社)
江島 直也* (NEC ソリューションイノベータ株式会社)
笹鹿 祐司* (NEC ソリューションイノベータ株式会社)
福井 知宏* (NEC ソリューションイノベータ株式会社)
後藤 晶* (明治大学)

地域コミュニティにおける人間関係の希薄化という社会課題に対して、筆者らは「ごみ出し」という日常的行為を切り口に、多様な人々が集う拠点（ステーション）を市民と共に展開、全市民が「自然に・楽しく・当事者として」参画・協働する活動を試行している。本講演では本活動に参加する個人の行動が環境配慮行動のステージモデルに準ずることを確認した結果を報告する。

P2 社会秩序，防犯

会場：ルーム 2

P2-1 (14:30～14:45)

スプレッドシートを使用した地理的プロファイリングソフトの開発

羽生 和紀 (日本大学)

スプレッドシートを利用した地理的プロファイリングソフトを開発した。スプレッドシートではデータが空間的に配置されるため、地理的プロファイリングにおける地理空間データ分析アルゴリズムの直観的理解を助ける。そのため初学者や実務者教育への貢献が期待できる。また、犯行地点情報以外の情報を利用する技法、例えばベイズ的アプローチの展開も容易であり、新技法の開発にも用いることができる。

*非会員

P2-2 自主防犯団体の協働ネットワーク構造と活動の活発さ

高木 大資* (東京大学)

大山 智也 (筑波大学)

讃井 知 (筑波大学)

島田 貴仁 (科学警察研究所)

自主防犯団体による活動は地域の犯罪予防にとって重要であるが、活動の活発さは団体によって異なる。本研究は、各団体の活動の活発さを規定する要因として団体同士のネットワーク構造に着目し、首都圏1市の全防犯団体(n = 265)間の協働ネットワークを調査・分析した。分析の結果、活発な団体と紐帯を有している団体およびネットワーク中心性(媒介中心性)の高い団体において、活発な防犯活動が行われていることが示された。

P2-3 (15:00~15:15)

防犯活動認知、犯罪情報は居住地評価に関連するか? : 住民調査データにもとづく検討

齊藤 知範* (科学警察研究所)

山根 由子* (科学警察研究所)

島田 貴仁 (科学警察研究所)

居住地評価には、対人関係等のさまざまな要素が関連することが想定されるが、防犯活動認知等が関連することも考えられる。本報告では、研究プロジェクトで実施した住民調査データにもとづき、居住地評価に対して、対人関係、防犯活動認知、犯罪情報等のそれぞれが及ぼす影響を分析する。

P2-4 (15:15~15:30)

系統的社会観察による住環境の特徴と住民意識との関係 —秩序違反と社会統制に着目して—

島田 貴仁 (科学警察研究所)

本山 友衣 (日本大学)

羽生 和紀 (日本大学)

大阪府の6市14地区を対象に、系統的社會観察と住民に対する質問紙調査を実施した。系統的社會観察では道路セグメント(n=526)を対象に土地利用、住環境、道路に関する特徴に加え、秩序違反の痕跡、防犯ステッカーなど社会統制の痕跡について測定した。質問紙調査(n=2636)では、被害リスク認知、秩序違反認知、安全性評価を測定した。両者を道路セグメント単位で統合し、客観指標と主観指標との関連を検討した。

*非会員

P2-5 (15:30～15:45)

日本における犯罪不安と秩序違反の認知の変化 ―repeated cross sectional data を用いて

鈴木 あい (University College London)

島田 貴仁 (科学警察研究所)

(公財) 日工組社会安全研究財団による「犯罪に対する不安感等に関する調査」は、日本全国の成人男女を対象に、2002 年以降 6 波にわたり、犯罪被害、犯罪不安、被害リスク認知、秩序違反の認知、地域環境評価を尋ねる社会調査である。同一設問が維持されていることから、本研究では、2004 年以降の 5 波分を repeated cross sectional data として統合し、各指標の時代的な変化、個人・地区属性による差異、それらの交互作用を検討した。

P3 コミュニケーション、メンタルヘルス

会場：ルーム 1

P3-1 (16:00～16:15)

オンラインで親密さを上げるためのソシオペタル型コミュニケーションの実験的検討

外山 優* (東京都市大学)

広田 すみれ (東京都市大学)

新型コロナウイルス禍により、コミュニケーションがオンラインで行われる事が多くなったが、オンラインコミュニケーションでは必ずしも親密さを感じることができないと言われる。そこで本研究では Sommer(1959) や Cook(1970) の着席行動の研究を参考に、画面への映り方を変えて 4 人集団で zoom で話をする実験を行い、その後相手に対する印象や話しやすさ等を尋ねて、オンラインでのコミュニケーションのより良い方法について考察する事を目的とした。実験方法はカメラに対して 1) 正面、2) 斜め (45 度) の 2 つの体の向きと、2 つの会話内容 (議論または雑談) を組み合わせた 4 通りのうち 2 通りを、4 人 1 組で 10 分間 2 セット行ってもらい、その後印象を測定した。結果は斜めに向いた場合には会話の印象が良くなり、また特に雑談条件で会話終了後の相手の印象が良くなる事が明らかになった。斜めを向いた状態では話し手が話し出す瞬間に顔を画面に向けたため、これを見た話し手が自分の話に興味を持ってくれた、と思い印象が良くなった可能性が考えられた。

*非会員

P3-2 (16:15～16:30)

若者のプライベート空間として利用される施設の持つ機能と環境・立地的特徴との関係

佐藤 理貴（筑波大学）

雨宮 護 （筑波大学）

若者にとって、社会から離れ一人あるいは親密な人と過ごせるプライベート空間は重要だが、その具体的な空間像は明らかでない。本研究では、大学生へのインタビュー調査から、若者がプライベート空間として利用する施設とその環境・立地的特徴との関連性を、プライベート空間が持つ機能に着目しながら明らかにした。得られたデータにコレスポンデンス分析を適用した結果、特定の環境・立地的特徴を持つ自宅外の様々な施設とプライベート空間としての機能との対応関係が明らかとなった。

P3-3 (16:30～16:45)

子どもと保護者のメンタルヘルスとサードプレイス、主観的経済状況の関連

芳賀 道匡 （日本大学文理学部人文科学研究所）

堀川 佑惟*（日本大学文理学部人文科学研究所）

上野 弘晶*（東京学芸大学大学院）

小林 翔太*（東京学芸大学大学院）

曹 蓮* （東京学芸大学大学院）

杉森 伸吉*（東京学芸大学教育学部）

最近 20 年間に、ますます精神的健康と貧困の関連が問題になっている。低所得者層が増加し、社会的なつながりを作ることや子どもを産み育てるための時間的・経済的余裕が失われてしまうことがその背景にある。そのような社会的状況において、職場や家庭ではない、サードプレイスが精神的健康を維持し回復させる機能をもつことが期待される。本研究では、東京都 A 市の小中学校全校の子どもとその保護者に質問紙調査を行い、それらについて探索的に分析を行った結果について報告する。

*非会員

P3-4 (16:45～17:00)

コロナ禍における住環境に関する実態調査

白川 真裕 (日本大学)

白川 徹* (日本大学)

若林 直子* (株式会社生活環境工房あくと)

小島 隆矢* (早稲田大学)

本研究では新型コロナウイルス関連の影響による、住環境への意識の変化について検討することを目的とし、web 調査を行った。2020 年 6 月に、一都三県在住の 25～59 歳の男女 528 名を対象に調査を実施し、コロナ禍前およびコロナ禍での自宅の満足度・自宅の環境について重視する点・自宅での過ごし方に関する変化、コロナ禍における自宅での回復環境、および自宅で快適に過ごすために行った工夫などについてたずねた結果を報告する。

P4 子ども，女性

会場：ルーム 2

P4-1 (16:00～16:15)

公園への子どもの移動自由性

畑 倫子 (文京学院大学)

雨宮 護 (筑波大学)

島田 貴仁 (科学警察研究所)

橋村 ちひろ (筑波大学)

子どもの移動自由性が低い（保護者による行動の規制が強い）ことと健康上の問題（肥満など）との関連が先行研究により指摘されているが、学校以外の場所への移動自由性については研究が少ない。そこで本研究では公園への子どもの移動自由性に焦点をあて、第 1 子が小学生である母親を対象に行なった調査の分析を行った。その結果、1 年生と 2 年生以上では子どもに移動自由性の許可を与える要因が異なっていたため、1 年生と 2 年生以上に分けて、公園への移動自由性、遊び、体型との関連について検討を行なった。

*非会員

P4-2 (16:15～16:30)

学校教員による児童の挨拶効果への期待と地域性の考慮

森 裕樹（東京都健康長寿医療センター研究所）

本研究では、学校教員が児童の挨拶習慣をどのように評価し、そのことが地域に対する認識とどのような関連を有しているのかを明らかにする。調査は、東京都内及び川崎市内公立小・中学校に勤務する教員を対象に、「暮らしやすいまちづくりに向けた取り組みについてのアンケート」として実施した。分析の結果から、地域の違いによって、児童の挨拶効果への期待と学校・地域間連携への期待との間に異なる傾向が示された。

P4-3 (16:30～16:45)

公的機関による子供・女性の安全対策の特徴

山根 由子*（科学警察研究所）

齊藤 知範*（科学警察研究所）

島田 貴仁（科学警察研究所）

子供・女性を狙った犯罪は、被害者に大きな痛手を与えるとともに社会に不安をもたらすため、その予防は社会にとって大きな課題である。都道府県警察・知事部局といった公的部門では多種の施策を実施しているが、施策の実効性を高めるためには、施策の対象・種類のプロセス評価が有用である。このため本発表では、都道府県警察・知事部局が実施した子供・女性の安全対策を調査し、施策の対象・種類等の傾向を報告する。

*非会員

プログラム	
12:45	Zoom ミーティングルーム開場
13:00	オープニング・諸注意
13:15	ワークショップ：『ゲームエンジンを用いたオンライン実験の提案』
14:15	小休止
14:30	パラレル・セッション1
	P1：自然環境，環境配慮行動
14:30	P1-1: Short-form Nature Relatedness Scale (NR-6) 日本語版作成に関する予備的検討（半沢・澤内・日田・山本）
14:45	P1-2: 注意回復理論（ART）に基づいた自然の回復効果の検証（熊谷）
15:00	P1-3: 海と山の選好とパーソナリティ特性の関連およびその調整効果の検討（吉野・小塩）
15:15	P1-4: ゴール・ブライミングによるレジ袋利用行動の抑制（青山・残華）
15:30	P1-5: 日常のごみ出しを通じた地域コミュニティ向上活動における環境配慮行動の検証：ステージモデルの観点から（日室・江島・笹鹿・福井・後藤）
15:45	小休止
16:00	パラレル・セッション2
	P3：コミュニケーション，メンタルヘルス
16:00	P3-1: オンラインで親密さを上げるためのソシオペタル型コミュニケーションの実験的検討（外山・広田）
16:15	P3-2: 若者のプライバシーベート空間として利用される施設を持つ機能と環境・立地的特徴との関係（佐藤・雨宮）
16:30	P3-3: 子どもと保護者のメンタルヘルスとサードプレイス、主観的経済状況の関連（芳賀・堀川・上野・小林・曹・杉森）
16:45	P3-4: コロナ禍における住環境に関する実態調査（白川・白川・若林・小島）
17:00	小休止
17:15	総会・表彰・クロージング